

**6～7世紀の琉球列島における  
国家形成過程解明に向けた実証的研究**

# 第1章

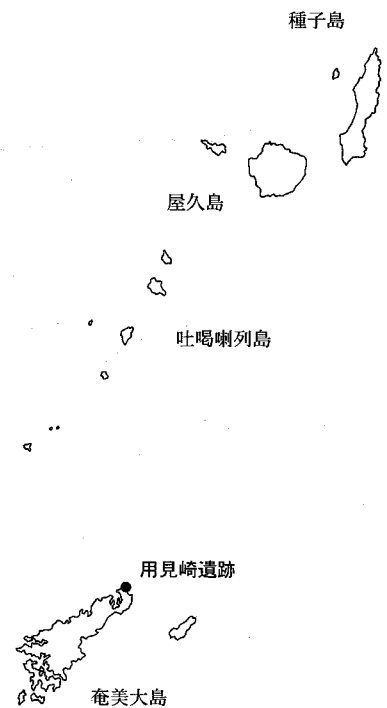
## 遺跡の概要と6～7世紀の琉球列島

6～7世紀の琉球列島の発掘調査事例を、奄美諸島と沖縄諸島において1例ずつ取上げる。前者は奄美大島笠利町用・見崎遺跡、後者は伊江島ナガラ原東貝塚である。この二つの事例分析が本研究の骨子をなしている。ここではそれぞれ遺跡の概要を紹介し、対象となる時代像の描写を試みる。

第1節 用見崎遺跡の概要

第2節 ナガラ原東貝塚の概要

第3節 6～7世紀の奄美と沖縄



## 用見崎遺跡の概要

### 1. 遺跡の位置と環境

用見崎遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町用字見崎に所在する。遺跡は奄美大島北部の笠利半島の北端、太平洋に面した海岸砂丘に立地する（図1）。この一帯は南北に長さ1kmの長浜砂丘が続き、東側にはイノー<sup>(1)</sup>の未発達なサンゴ礁が海上に300mのびる。遺跡はこの長浜砂丘の北端にある。遺跡西側には標高100～140mの山塊が急斜面で迫り、谷間に多くの水路をつくっている。半島先端には崖から小さな滝水が流れ落ちている。砂丘後背地の小規模な湿地には、明治、大正期に水田がつけられ、そこにサバニ（小型の漁船）のはいる水路が通じていたという。遺跡は、小範囲ながら多様な環境を揃えた場所に立地している。遺跡は現在、長島熱帯植物園敷地内にある。

### 2. 遺跡の調査

用見崎遺跡は、1994年笠利町教育委員会によって最初に発掘調査された。その後1995年から1997年まで熊本大学考古学研究室が調査し、これまでに合計263m<sup>2</sup>が発掘された（笠利町教育委員会1995、山田ほか1996、若杉ほか1997、若杉1998）。4次にわたる調査の結果、遺跡は山裾から海岸に順次折り重なって堆積する三つの砂丘で構成され、それぞれに文化層を含んでいることがわかった。三砂丘を古い方から仮にA砂丘、B砂丘、C砂丘としよう。A砂丘は旧海岸上にはほぼ水平に堆積し、B、C砂丘はその上に山をつくりながら海にむかって斜めに堆積している（図1-4）。A砂丘では二つの文化層（XVI層、X層）、B砂丘では二つの文化層（VIII層、VI層）、C砂丘では一つの文化層（3層<sup>(2)</sup>）を確認した。B砂丘とC砂丘ではそれぞれ兼久式土器期の生活面を検出したが（VI層、3層）、A砂丘では、XVI層において同一個体とみられる土器片19個を得たにすぎない。B砂丘のVI層とVIII層においてコラムサンプリングを実施し、脊椎動物遺体、貝類遺体、植物遺体についての分析資試料とした。

### 3. 遺構

C砂丘の兼久式土器期包含層において、互いに1.2m離れて併行する2棟の建物跡が認められた。建物跡は1辺3mほどの方形をなす。2棟の間に硬くしまった土手状高まりを認めた。建物の近くに多くのヤコウガイが長さ1.5mの列状あるいは塊状に累積した状態でみつかった。ヤコウガイの出土総数は220個である。これを除く建物周辺には、破碎された小型貝類がまとまって廃棄されていた。

建物から3mほどの距離をおいて、海岸から砂丘後背地に向う溝が南北に掘られている。溝の大きさは上面の幅3.2m、深さ1.4m、断面はU字形である。溝はB砂丘とC砂丘の堆積の不整合面を利用して掘削されている。明治以後の船の水路もこれに重なる。溝は現在も排水溝として機能し、途中で暗渠となって海に注いでいる。溝を隔てた山側のB砂丘の包含層（VI層）には明瞭な遺構がみられず、兼久式土器、石器を含む薄い貝層が連続して何枚も堆積していた。

### 4. 遺物

人工遺物（図2）土器、石器、貝製品、銭貨を得た。もっとも早い時期の土器は、A砂丘のスセン當式土器<sup>(3)</sup>である。次にB砂丘の兼久式土器で、最も早い時期の土器がC砂丘の兼久式土器である。石器では石皿2個（以下序数詞を省略）、敲石・磨石12、クガニイシ形石器3が出土し、貝製品では貝錘56、貝匙12、貝皿1、貝符1、貝玉31、ヤコウガイ蓋製敲打器7を得た。金属製品では歯骨に鋭利な切痕をもつギンガメアジが出土し、鉄製品の存在を間接的に示した。このほか開元通宝が1枚、

B砂丘の包含層で出土した。以上の遺物はすべて兼久式土器に伴う。

**自然遺物** 脊椎動物ではイノシシ、ウミガメ、大小の魚類が認められた。魚類では体長20cm前後の小型の魚が多く、また特定の魚種への偏りのないことが特徴である。貝類では、潮間帯下部の小型貝が多く、イノーや礁斜面にすむ貝類は少ない。このような傾向はイノーの未発達なサンゴ礁環境に因るといえる。植物では、タブの種子、ブナ科の子葉が検出された。

## 5. 時期

砂丘の形成状況から、それぞれの包含層はA砂丘からB砂丘、C砂丘の順に新しくなる。

A砂丘含層XVI層の時期は、出土したスセン當式土器の編年的位置から推測して、4世紀前後とみられる。なお木炭によるXIII層の<sup>14</sup>C測定値は1770±70BP（交点AD380）であり、これが妥当な値であれば、XVI層の年代はこれより古いことになるが、それでも4世紀前後の比定に大きな問題はないだろう。

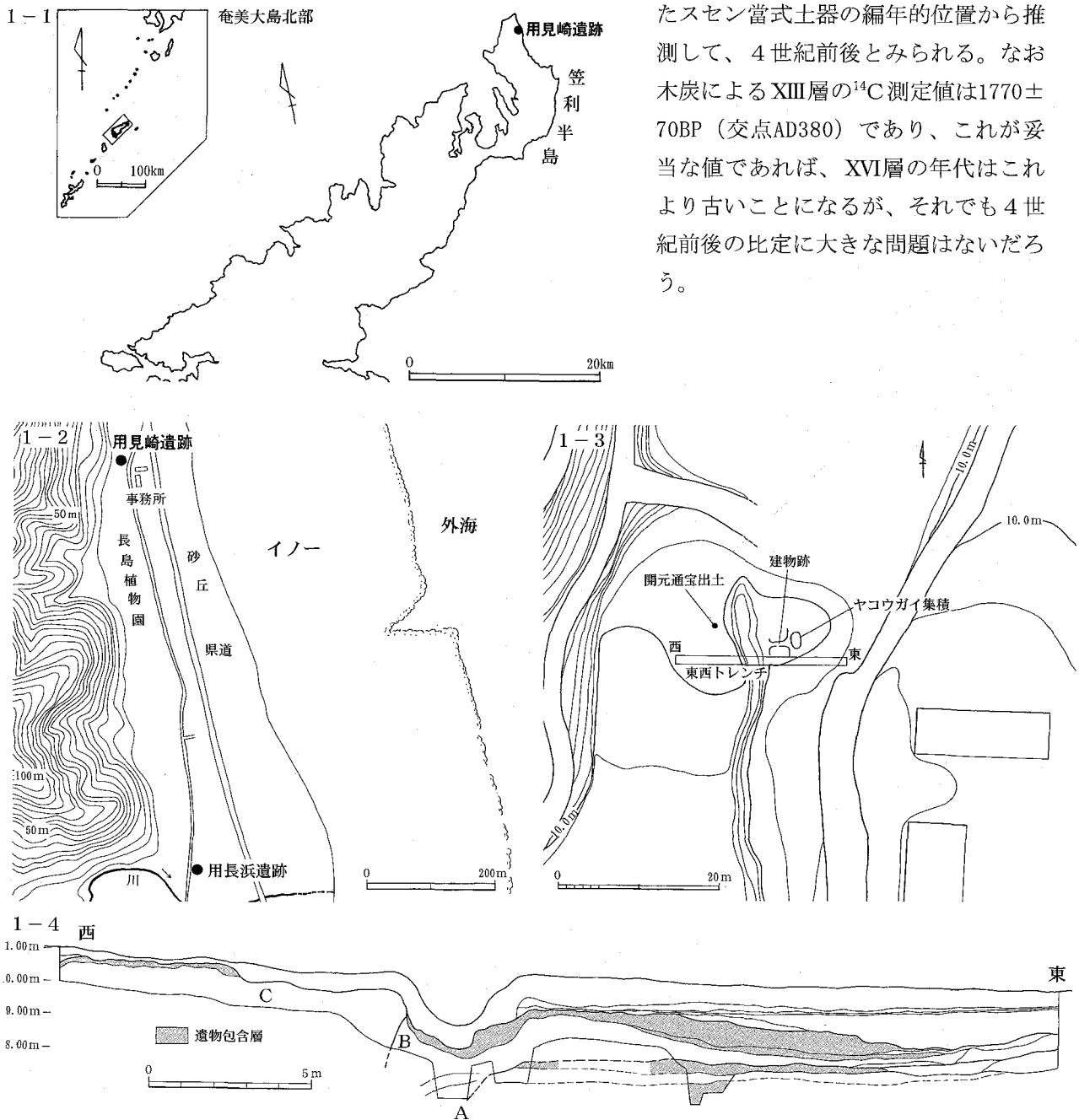


図1 用見崎遺跡の位置と層序

1-1. 奄美大島北部と遺跡の位置 1-2. 遺跡周辺の地形 1-3. 遺跡と遺構等 1-4. 東西トレンチ南壁断面図

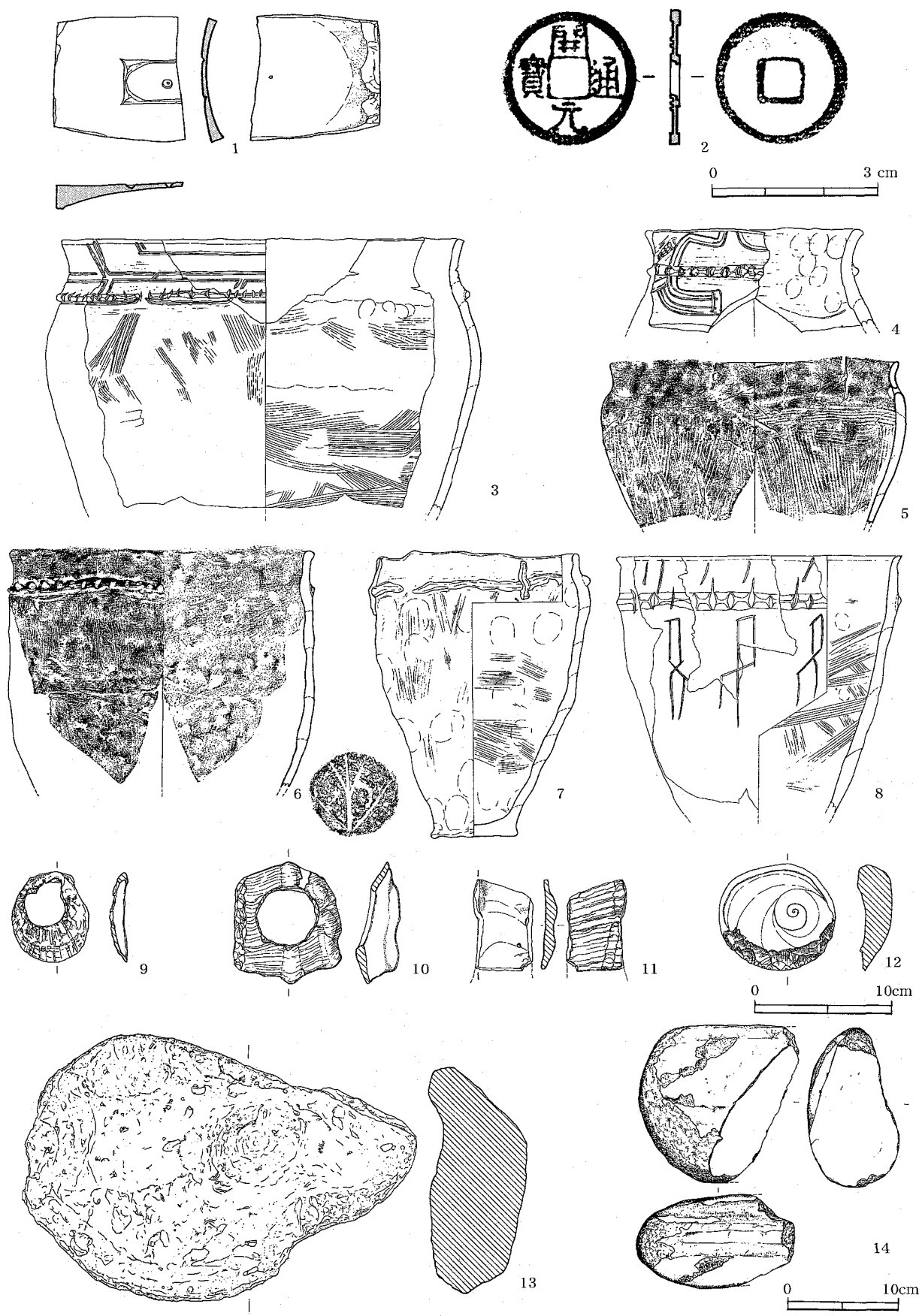


図2 用見崎遺跡のおもな出土遺物

1. 貝符 2. 開元通宝 3. ~ 8. 兼久式土器 9. 有孔ウミギガイ製品 (貝錘) 10. 有孔ヤコウガイ製品 (貝錘) 11. ヤコウガイ容器柄部  
 12. ヤコウガイ蓋製破打器 13. サンゴ製石皿 14. クガニイシ形石器 1・5・6: C砂丘包含層出土 それ以外: B砂丘包含層出土

B砂丘包含層VI層の時期は、開元通宝（621年初鑄）が相伴していること、本開元通宝が初唐の特徴を備えたものとする中国の銭貨研究者の指摘<sup>(4)</sup>から、7世紀前後である可能性が高い。木炭によるVI層の<sup>14</sup>C年代測定値が $1660 \pm 70$ BP（交点AD655）であることも、上記の比定に矛盾しない。

C砂丘包含層3層では兼久式土器に広田上層タイプの貝符（木下1987）が相伴している。木下の年代観では当該タイプの貝符の上限は6世紀前後である<sup>(5)</sup>。本貝符が上層タイプの中でもっとも後出の特徴を備えていることから、その所属年代は6世紀をかなり下るとみていいだろう。ところで、3層の兼久式土器は、B砂丘VI層のそれと相互に共通した部分が多く、両者間に長い時間的隔たりが存在したとは考え難い。ただ前者の土器は後者の土器に比べて無文化が進んでいることから、この間に一定の変化が進行したといえる。その時間はB砂丘の上にC砂丘が形成される時間に対応する。以上から3層の時期は、B砂丘をやや降る時期（7～8世紀）に比定されよう。

## 5. 成果

**7世紀の生活跡** 用見崎遺跡は、山側から海岸にむかって順次堆積する三つの砂丘上に形成された生活跡であり、出土遺物から、その時期を4～5世紀、7世紀前後、7～8世紀と推定できる。7世紀代の二つの文化層にはともに兼久式土器が伴う。

**ヤコウガイ貝殻の集中** 兼久式土器に伴って多くのヤコウガイが出土している。ヤコウガイ採集には礁斜面での潜水を必要とするが、ヤコウガイと同様の環境に生息するチョウセンサザエはほとんど採取されていない。ヤコウガイは建物付近に極端に集積しており、周辺に分布する食料残滓とは出土状況が明らかに異なる。これらは、ヤコウガイが目的的に採取され、建物付近に意図的に集められていたことを推測させる。またヤコウガイ蓋の出土数が貝殻本体個体数の3割にすぎないことは、本遺跡で食されたヤコウガイ以外の貝殻も、本遺跡に存在していることを示唆する（辻村1998）。ヤコウガイ貝殻を意図的に集中させたとみられるこうした状況は、本遺跡の大きな特徴である。

**溝の掘削** 兼久式土器期に溝が掘削されていることは特筆される。この溝は7世紀前後の兼久式土器の時期に初めて掘削され、これが若干埋まったのち、新たに溝の肩を補強して平地からの砂の崩落を阻止し、その後溝はさらに若干埋まり、C砂丘の堆積とともに埋没してしまうが、7～8世紀前後の兼久式土器の時期に改めて掘られている。こうした掘削の繰り返しは、ここが地形本来の構造的な排水路であったことに関るのであろうが、溝が人々の生活に密接な機能を果たしていたことをも示唆する。明治期にこれが海岸から船の入る水路であったことを参照すれば、当時においても同様の機能を果たしていたと推定することが可能である。

## ナガラ原東貝塚の概要

### 1. 遺跡の位置と環境

ナガラ原東貝塚は、沖縄県国頭郡伊江村字川平に所在する。遺跡は沖縄本島西北の離島伊江島の南海岸に面し、海岸砂丘が内陸平地に移行する標高7m前後の緩傾斜地に位置している(図3)。伊江島は本部半島備瀬崎の西5kmにある、長径8kmの楕円形の平坦な隆起サンゴ島である。島の大部分は石灰岩に覆われるが、基盤をなす伊江層が城山や北海岸など4箇所露出する(木崎1985、p.106)。島の南側には砂丘とサンゴ礁が発達し、沖縄貝塚時代の遺跡が集中している。ナガラ原東貝塚もその一つである。遺跡の西側に大きな地下水流路があり、ナガラ原東貝塚人もそこからの湧水を利用したことが推定される(松本2000)。遺跡は現在タバコ畑となっている。

### 2. 遺跡の調査

遺跡は1977年に発見され(伊江村教育委員会1979)、1997年に伊江村教育委員会が8m<sup>2</sup>の試掘を行ない、沖縄貝塚時代中期と後期後半(以下沖縄を省略)の包含層の存在を確認した(伊江村教育委員会1999、pp.61~65)。その後1998年から2001年まで熊本大学考古学研究室が発掘調査し、これまでに合計128m<sup>2</sup>を発掘している(藤江1999、谷2000、新里2001、木村2002)。5次にわたる調査の結果、遺跡は少なくとも南北30~40m、東西60~70mの範囲に広がり、貝塚時代前期~中期と後期の2時期の遺跡であること、後期の包含層に貝殻等食料残滓の集積のあることがわかった。貝塚時代前期~中期の層は地山直上に堆積し、同後期層は無遺物層であるVI層を介してV層以上に堆積する。その中心をなすのがIV層であり、その下部(以下IV下層とする)に大型貝類が集中する。IV下層の自然遺物集中箇所等についてコラムサンプリングを実施し、脊椎動物遺体、貝類遺体、植物遺体の分析資試料とした。I~III層は積年の耕作による攪乱層であるが、出土遺物はIV層と変わらない。調査は継続中であり、現在IV層の掘り下げを行なっている。

### 3. 遺構

IV層下のVII層面からピット状の掘りこみのあることをトレンチ断面で認めているものの、全体の発

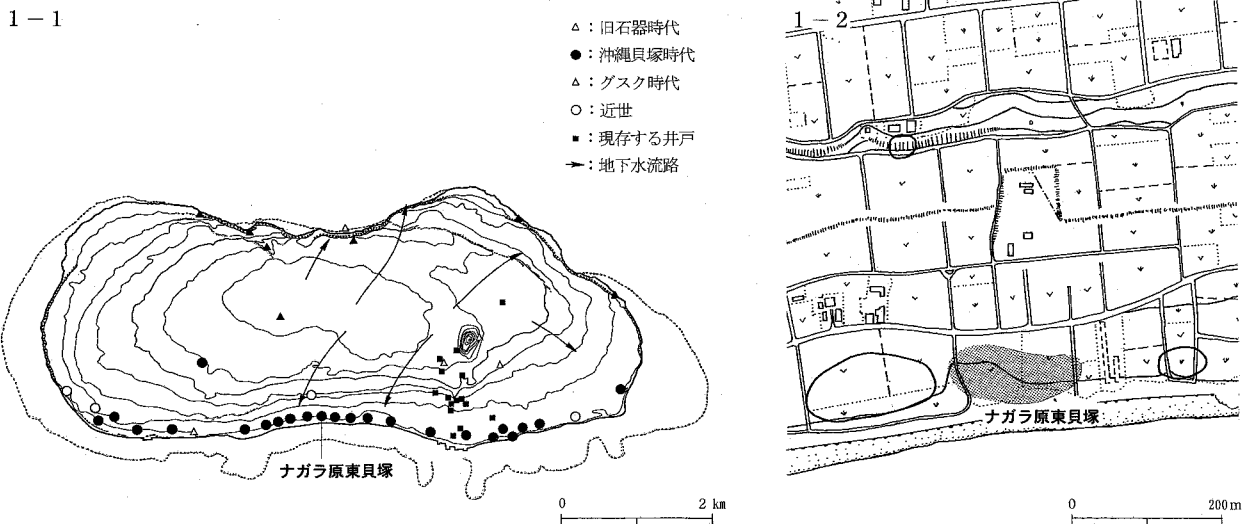


図3 伊江島とナガラ原東貝塚  
1-1. 伊江島とナガラ原東貝塚 1-2. 遺跡周辺の地形

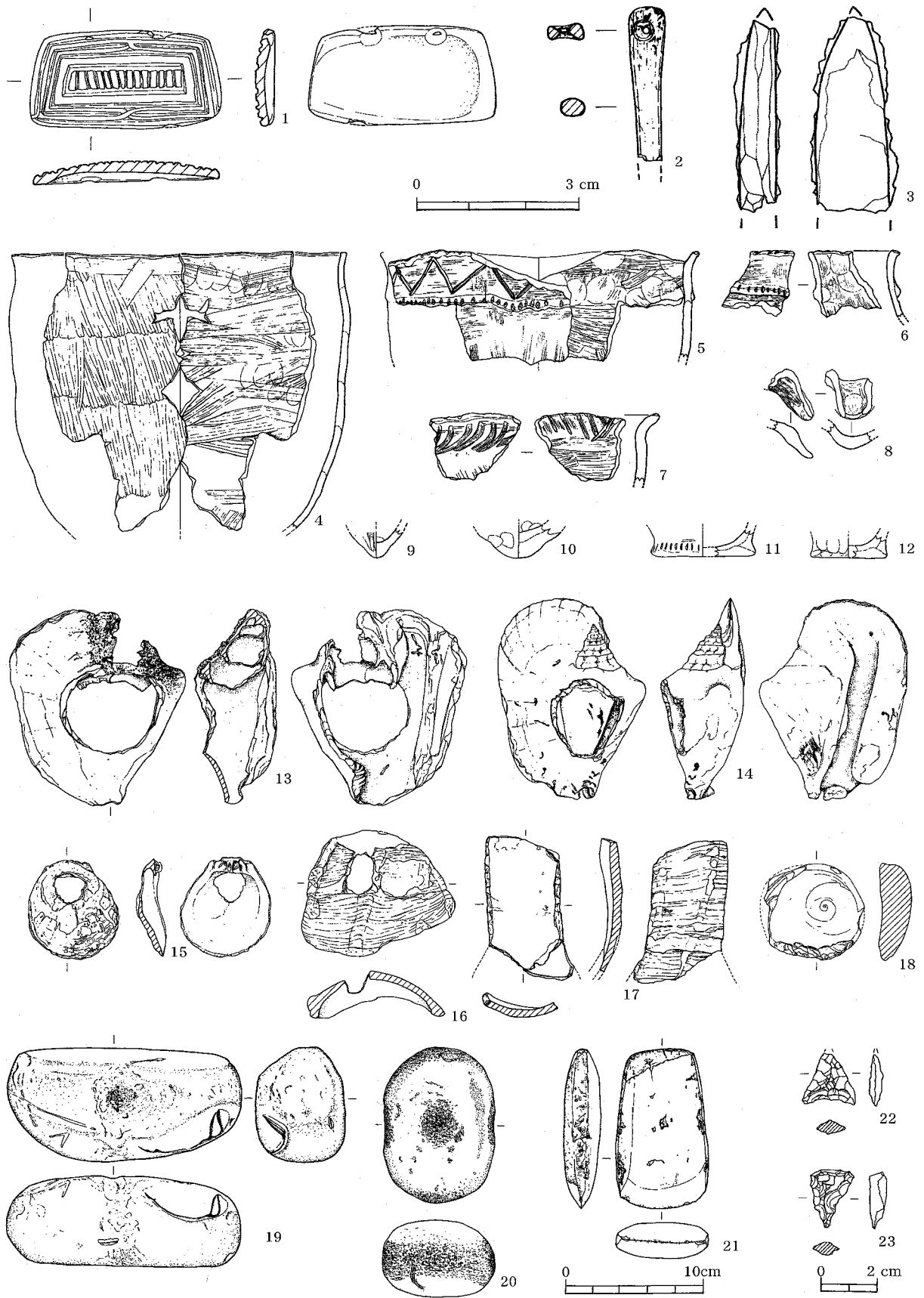


図4 ナガラ原東貝塚のおもな出土遺物

1. 貝符 2. 骨製針 3. 尖頭状扁平鉄製品 4~12. 土器 13・14. ゴホウラ加工品 15. 有孔ウミギクガイ製品(貝錘) 16. 有孔ヤコウガイ製品(貝錘) 17. ヤコウガイ製品柄部 18. ヤコウガイ蓋製敲打器 19. クガニシ形石器 20. 敲石 21. 石斧 22. 石鏃 23. 石錐



掘深度がその深さに至っていないので、現在のところ自然遺物の集積以外にはっきりとした遺構は確認されていない。自然遺物の集積は、見かけ上貝類が主体である。それらは少なくとも厚さ20cm、100m<sup>2</sup>の範囲に密に分布している。サラサバタイ、シャコガイ類、マガキガイが目立ち、巻貝のほとんどが破碎されている。そのほか焼けた魚骨、獣骨が混在することから、これらを食料残滓の集積と判断した。こうした集積の形成過程を調べるために、シャコガイの右殻と左殻の合弁関係を調べた。これまで左右殻合計1026個のうち116個体が合弁し、合弁率は11.3%である。合弁率は今後増加すると予想されるものの、こうした低い合弁率は、半数以上のシャコガイ「片身」で遺跡に持ちこまれていたことを推測させる。また互いに7m離れて合弁した例があり、少なくとも径7mの範囲が一括の廃棄空間であったことを示唆する。

#### 4. 遺物

**人工遺物 (図4)** 土器、石器、貝製品、骨製品、鉄製品等を得た。土器はアカジャンガー式土器<sup>(6)</sup>の特徴をもつものが含まれるが、これに該当しない尖底土器も一定量存在している。石器では石皿・台石3、敲石・磨石25、クガニイシ形石器5、石斧1、石鏃2、石錐1が出土し、貝製品では貝錘93、貝匙14、貝皿21、貝符1、貝玉2、ヤコウガイ蓋錘敲打器1、加工されたゴホウラ・アツソデガイ9を得た。その他骨針3、有孔土製品1、尖頭状で扁平な鍛造鉄製品1がある。用見崎遺跡に比べると、ヤコウガイ製品が非常に少なくゴホウラ加工品が目立つ。貝符は広田上層タイプである。

**自然遺物** イノシシ、ウミガメ、ヤマガメ、大小の魚類、貝類、炭化したイネ、コムギ等を検出した。イノシシはリュウキュウイノシシの可能性が高いとされ、これが陸棲動物骨ではもっとも多い。魚類ではサンゴ礁やイノーに棲むブダイならびに多様な小型魚が混在する。貝類では小型の二枚貝であるリュウキュウヒバリガイとミドリアオリガイが大半を占めることが特徴である。植物ではこれまでに、イネの穎果22、籾穀110、コムギ1、タブノキ12等を検出した。土壌および出土土器によるプラント・オパール分析では、土壌、土器双方ともにイネのプラント・オパールは検出されなかった。

#### 5. 時期

以下の検討によって、6世紀前後に比定するのが妥当と判断する。

**編年的検討：**IV層の土器にはアカジャンガー式土器に該当するものが有文土器の20%存在する。しかし尖底土器も全体の24%あって、IV層は平底土器のみで構成されるアカジャンガー式土器そのものの時期とは言い難い。後期土器の変化傾向が尖底土器から平底土器に向う方向性をもっている(村上1999)ことを勘案すれば、IV層の編年的位置付けは、アカジャンガー式より古くなる。

**貝符による検討：**ナガラ原東貝塚IV層出土の貝符は、広田上層タイプである。この貝符の時期的検討に、対岸の兼久原貝塚の貝符が良好な比較材料となる。兼久原貝塚の貝符は本貝符と同様、方形の枠を重層的に廻らす彫刻文様をもつ。兼久原貝塚では開元通宝が他の貨幣をまじえず単独で2枚出土しており、その形状は用見崎遺跡の開元通宝と同様、初唐の特徴をもつ。両貝塚の貝符を比較すると、兼久原貝塚の方が簡略化しており、本貝符より型式的に新しい段階のものと判断できる。したがって兼久原貝塚の時期を開元通宝によって7世紀前後とみれば、本貝塚IV層の時期はこれより若干古くなる可能性がある。このことは、以下の2点からも傍証できる。すなわち、本貝符は広田中層タイプにしばしばみられるX字状の交差表現をもち、広田上層タイプ貝符の中でも古手に属すると判断できる。また初唐の特徴をもつ開元通宝を出土した用見崎遺跡に伴う貝符は、広田上層タイプでも新しい段階のものである。

貝製品による検討：ナガラ原東貝塚からは、ゴホウラ、アツソデガイを加工したものが9点みつまっている。これらはいずれも貝殻内唇部にゴカイなどの生息痕跡をもち、採集段階ですでに死んだ個体であったことがわかる。したがってその採集目的は、食用ではなく貝殻の利用にあったとみてよい。これらのうち8個は背面中央部に穿孔されており、腕輪を意識した加工痕と判断できる。しかしこの時期、沖縄諸島においてゴホウラ製腕輪の使用習俗はすでになく、こうした背面加工に対応する腕輪を消費していたのは、種子島広田遺跡（中層・上層）人と九州・西日本の古墳時代人である（木下1996）。その使用時期は前者では4～5世紀以降、後者では5世紀から6世紀前半である。

**<sup>14</sup>C測定値** これまでに木炭による<sup>14</sup>C測定を、IV層で2例、V層・VII層で各1例、それぞれ別の地点の試料でおこなった。IV層は貝層内試料、V層は貝層のないトレンチ内試料である。結果は以下のとおりである：

IV層 1570±60 BP (calAD385～625)、1490±60 BP (calAD430～660)、1620±80 BP (calAD245～620) (いずれも補正年代値、95%probability、以下同様)

V層 1410±60 BP (calAD555～705) (7)

VII層 2780±40 BP (calBC1005～825)

IV層の数値に注目すれば、5世紀後半から6世紀後半の数値を得ることができる。

以上4方向の検討から、本遺跡IV層の所属時期は、7世紀前後に比定できる兼久原遺跡を遡る、6世紀前後であると判断したい。

## 6. 成果

**6世紀前後の生活跡** ナガラ原東貝塚は、6世紀前後の生活跡を遺す海岸砂丘上の遺跡である。少なくとも径7mの広さの廃棄単位を含む、食料残渣廃棄の集積が認められている。貝類等は平坦な砂丘後背地に原位置を保って堆積しており、集積は比較的短い時間内に形成された可能性が高い。

**環境** 当時の遺跡は、やや開けた海岸林に隣接し（黒住2000）、沿岸部にはススキとタケが混在していたことが推定された（宇田津ほか2001）。またリュウキュウヤマガメの存在は、当時島内陸部に森林域のあったことを示唆している（当山ほか2001）。当時の海域環境は良好で、貝類組成は現在と同様であったと推定されている（黒住1999）。

**穀物の存在** IV層のフローテーションによって、イネとコムギが検出されたことは大きな収穫である。本例は現在のところ琉球列島で確認できる炭化穀物の最古の実例である。しかし草本類や雑草の種子が検出されていないこと（高宮2000）、土器のプラント・オパール分析でイネが検出されなかったこと（宇田津ほか2001）、大型貝類の貝殻内部に堆積した土壌の花粉分析によってもイネが検出されなかったこと（木村編2002）から、これら穀物種子が遺跡付近で栽培されていた可能性は低い。

**漁法** 出土した脊椎動物骨の重量比は獣骨より魚骨の方が多く、当時の生活が漁労に比重をおいたものであったことを推測させる。魚骨の分析から、その漁法には①サンゴ礁やイノーでの魚種選択性の低い漁法、②大型ブダイの選択的漁法、③沿岸浅瀬における回遊性小型魚の漁、という3パターンが推定されている（樋泉2001）。

**季節性** ニシン科の魚骨が集中して出土したことから、沿岸の浅瀬に來遊する小型魚をねらった季節的な漁の存在が指摘された（樋泉2001）。8～9月にサンゴ礁を回遊し始めるミズン、秋から春にかけてサンゴ礁の沿岸からやや沖合いの浅瀬を回遊するヤマトミズンが考えられている（樋泉2001）。季節性が具体的に指摘されたのは重要である。

## 6～7世紀の奄美と沖縄

用見崎遺跡は7世紀前後の生活跡であり、ナガラ原東貝塚は6世紀前後の生活跡である。前者は兼久式土器を主体としており、多量のヤコウガイを伴う。後者は平底土器を含む一群の土器を主体としており、ゴホウラ加工品を伴う。また前者はヤコウガイを意図的に集めた場所とみられ、後者では現在最古例のイネとコムギが検出したことで、当時の穀物食を実証した。ここでは調査した2遺跡の比較を通して、6～7世紀の歴史状況の一端を明らかにすることを旨とする。初めに土器の検討から相互の編年の関係を整理し、次に貝交易の検討から当時の歴史状況を論述して、奄美・沖縄の時代像を描くことにしよう。

## 1. 6～7世紀の奄美と沖縄の土器編年

## (1) 用見崎遺跡の兼久式土器

## ① 兼久式土器の定義

兼久式土器は、奄美諸島を中心に分布する土器で、多くの平底の甕と少数の壺からなる。土器はくびれた頸部と外反する口縁をもち、頸部付近に断面三角形の突帯を廻らしてこれに刻目をいれ、鋸歯状の粗い沈線が加わる。甕底面にはしばしばオオハマボウ<sup>(8)</sup>の木葉圧痕がみられる。兼久式土器のみで構成される単一文化遺跡が多い。徳之島面縄第三貝塚出土の土器を標識として命名された(河口1974、1996)。

## ② 分類と編年

兼久式土器の分類は、施文状況による分類案(中山1983、1984)、突帯と沈線文に注目した分類案(高梨1995)が提示されている。近年出土状況の良好な遺跡や、開元通宝、土師器、黒色土器、焼塩土器など年代の手掛かりになる資料の増加に伴い、細分された類型と相対年代の対応が可能になってきている。高梨修は、小湊・フワガネク遺跡の兼久式土器の検討を通してこれまでの成果を総合し、兼久式土器の編年案を提示した(高梨1999)。表1は高梨分類に依拠し、あやまる第2貝塚における池畑耕一の指摘(池畑1984)、長浜金久遺跡における弥栄久志の検討(弥栄1985)を参考に作成した兼久式土器の変遷表である<sup>(9)</sup>。用見崎遺跡の土器は、一連の兼久式土器変化段階の前半に位置づけられる。500年にわたり連続的に形式変化する兼久式土器全体を、仮に兼久様式と総称しておきたい。

表1 兼久式土器の変遷

	主体的文様※	比定時期	時期を示す共伴遺物	<sup>14</sup> C 測定値	対応する遺跡
1	沈線文	6世紀前後	南九州古墳時代後期系土器		フワガネク、あやまる第2、長浜金久、サウチ、マツノト下層、面縄第一
2	刻目突帯文+沈線文	7世紀前後	開元通宝 広田上層タイプ貝符	AD650 (面縄第一、IV層) AD655 (用見崎遺跡、VI層)	見崎、フワガネク、長浜金久、サウチ、先山、マツノト下層・上層、面縄第一
3	刻目突帯文	8世紀前後			長浜金久、マツノト上層
4	貼付位置の下がる刻目突帯文	9世紀前後	土師器(9～10世紀)、 焼塩土器	AD830～890(長浜金久第I、 19層)	泉川、長浜金久、マツノト上層
5	突帯文	10世紀代	土師器(9～10世紀)、 黒色土器、焼塩土器	AD910 (アヤマル第二、6層)	泉川、長浜金久、マツノト上層

(高梨1999の分類をもとに作成)

### ③ 系譜

兼久式土器の前段階に編年されているのは、スセン當式土器である。スセン當式土器は脚台をもつ甕を主体として、少量の丸底壺を伴い、4～5世紀に比定されている型式の土器である。底部が脚台形状であること、多条突帯文の効果をねらう施文が認められること、赤色顔料を塗布する例のあること、などにおいて南九州・九州との関係が指摘されている（上村ほか1984、新里2000）。現段階でスセン當式土器と兼久式土器の系譜関係が型式学的に解明されているわけではないが、くびれ平底をもつスセン當様式土器の存在が指摘されており（新里2000、p. 168）、こうした中間的土器を介して両型式が連続する可能性は高い。中園聡は、奄美の弥生時代「中期初頭以降は南部九州の弥生土器と親縁性のある土器が甕を中心に存在している」と指摘している（中園2000、p. 116）。奄美の在地土器は、弥生時代中期併行期以降6～10世紀の兼久様式に至るまで、南九州の影響のもとに連続的に型式を変化させてきた、とみることが可能である。

#### （2）ナガラ原東貝塚IV層土器の位置づけ

ナガラ原東貝塚IV層の土器を、沖縄諸島の土器の型式変化上に位置付けるために、以下貝塚時代後期の編年をとりあげて論じる。

##### ① 貝塚時代後期編年研究の到達点と問題点

貝塚時代後期の編年作業は、多和田真淳の編年案提示以来不断に続いて現在に至っている（多和田1956、中村ほか1974、沖縄県考古学会1978、高宮1978、1981、1983、1984、安里1990、高宮1991、村上1999、新里1999、木下2000、宮城2000、岸本ほか2000など）。さらに1999年以来の沖縄後期土器研究会による基礎的作業や、南九州・沖縄の研究者による弥生土器を対象とした比較研究は、貝塚時代後期研究を着実に進めている。

この結果、貝塚時代後期の始まりは弥生前期～中期に併行することが、複数の論者によって明確に示された。現在、後期編年はその開始期から10世紀に至るまでの間に4～5型式が設定され、それぞれについて九州編年との対応関係がほぼ確定し、琉球に搬入された遺物によって歴年代が絞られつつある。貝塚時代後期の土器は、基本的に多くの甕と少数の壺がセットをなし、常に多数の無文甕を伴う。貝塚時代後期初頭の土器形状はほとんど尖底であるのに対し、終末のそれはほとんど平底であるのが大きな特徴である。土器はしたがって約1000年かけて尖底から平底に漸移的に変化すると大局的には理解される。後期土器研究会によって示された最新の編年案では、沖縄貝塚時代は尖底主体の前半部分と、平底主体の後半部分が整然と整理されている。前者には浜屋原式、大当原式が、後者にはアカジャンガー式、フェンサ下層式がそれぞれ比定されている（表2左側）。

この編年案と従来の高宮廣衛編年（表2右側）とを比較すると、新編年案には尖底と平底の混在する中間の段階、高宮編年の具志原式に相当する段階がない。不幸にもナガラ原東貝塚IV層はちょうどこの段階に相当するのである。ナガラ原東貝塚IV層を編年的に位置付けるためには、後期編年でもっとも悩ましい中間部分の編年について論じなければならない。

具志原式は、具志原貝塚第4層の壺と甕の形状と文様を基準に高宮廣衛によって設定された型式である<sup>(10)</sup>（高宮1978）。高宮は尖底土器と平底土器が混在する状況から、これが数型式に細分される可能性を示唆している（高宮1996、p. 79）。沖縄後期土器研究会も具志原貝塚第4層の土器群が時期差をもつ一群であることを予測したが、「区分困難な近似する資料群で構成され〔中略〕細分にいたっていない」。しかし一方では「尖底と平底が同時並行した可能性を否定することは現在の出土状況からは難しい」として、具志原貝塚、具志堅貝塚等の編年上の位置付けを保留している（岸本ほか2000、pp. 140～141）。

表2 沖縄貝塚時代後期の二つの編年案

後期土器研究会編年(2000年)			九州 編年	高宮廣衛編年(1991年)				
沖縄編年	土器型式(試案)	搬入文物		沖繩編年	土器型式	沖繩の九州系土器	その他	
中期	仲原式		縄文晩期	前期 V	仲原式			
後期	過渡期	阿波連浦貝塚 IV層土器群	弥生	前期	後期 I	真栄里貝塚	板付II式 亀ノ甲式類似	
	前半期	尖底期		中期	II	具志原式	山ノロ式	
				後期	III	アカジャンガー式	免田式	アカジャンガー式は中津野式並行か?
	後半期	平底期	アカジャンガー式	古墳 ～ 平安	IV	フェンサ下層式		類須恵器
		フェンサ下層式	開元通宝					

この問題について、ナガラ原東貝塚の発掘調査をもとに私見を述べたい。

#### ② ナガラ原東貝塚IV層の土器

本章第2節で述べたように、ナガラ原東貝塚IV層(下部)には食料残渣が直径10m以上の範囲に密に存在し、その内側には厚さ20cm径7m以上の廃棄単位が含まれる。貝殻の出土状況並びに自然遺物の堆積状況からみて、これらは廃棄された状況を保ったまま埋没したと判断しうる。一群の土器はこれにともなってみつかっている。IV層(上部)からIII層にかけては、畑の耕作等による過去の攪乱が及んでいるが、それらの層からの土器もIV層の土器群と同様である。以上から、ナガラ原東貝塚IV層の土器群に、その堆積過程において時期の異なる遺物の混在した可能性はきわめて低いと判断できる。つまり、尖底土器と平底土器の併存する一時期があったと考えられるのである。

#### ③ 具志原式の再検討

具志原式は1968年の具志原貝塚調査IV層の土器を標識として設定された土器形式である。発掘調査ではI～Vの5層が認められ、III層白砂以下は未攪乱層である。遺物の92%はIV層に集中し、IV層は上・中・下の三部にわけられている。当時「須玖式土器」として弥生中期に比定された土器は、IV層下部とV層で合計29片みつき、広田上層タイプ貝符はIV層上部で出土している。「須玖式土器」は現在山ノロ式土器と認識され、弥生「中期後半または下つても後期初頭頃」とされる(中園2000, p.122)。貝符は6世紀前後に所属する可能性が高い。以上から、具志原貝塚IV層は紀元前後から6世紀の幅をもつことがわかる。具志原式はこれらを一括して対象とし設定されたものなのである。結果的に尖底土器と平底土器の並存が具志原式によって代表されているものの、それは新旧の混在による現象である可能性が高い。したがって、ここでは具志原式という型式概念をひとまず使用しないことにする。

#### ④ ナガラ原東貝塚IV層の編年的位置付け

尖底土器と平底土器の共存する時期が、尖底土器を主体とする型式と平底土器を主体とする型式の間に現実に存在した、という前提でナガラ原東貝塚の土器を貝塚時代後期編年に位置付ける場合、この位置付けが従来の編年に矛盾しないことを示さなければならない。私は以下のような方法をとった。沖縄諸島北部の貝塚時代後期初頭から終末にいたる7遺跡について、それぞれ尖底対平底の比率、口唇部列点文の口縁部破片総数に占める割合、同じく刻目突帯の割合、有文口縁対無文口縁の比率につ

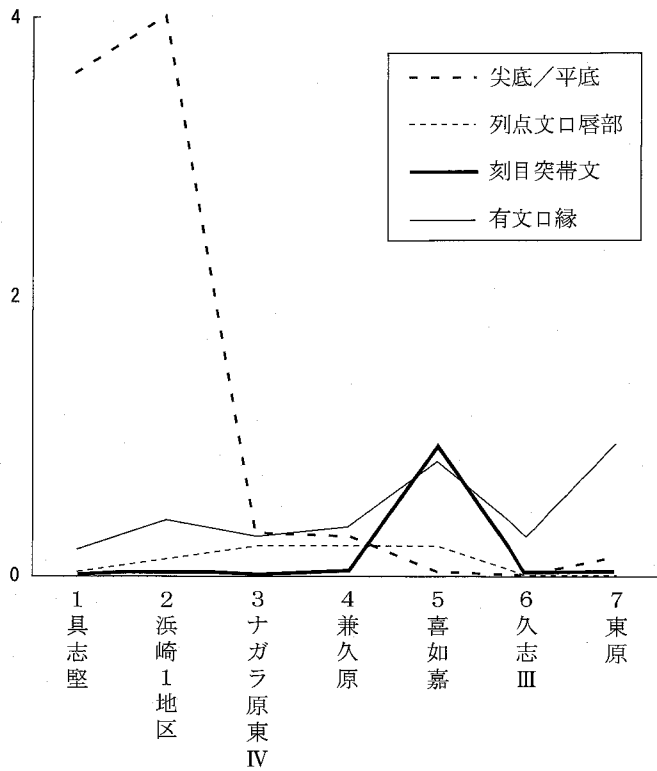


図5 沖縄貝塚時代後期土器の変遷(表3に対応)

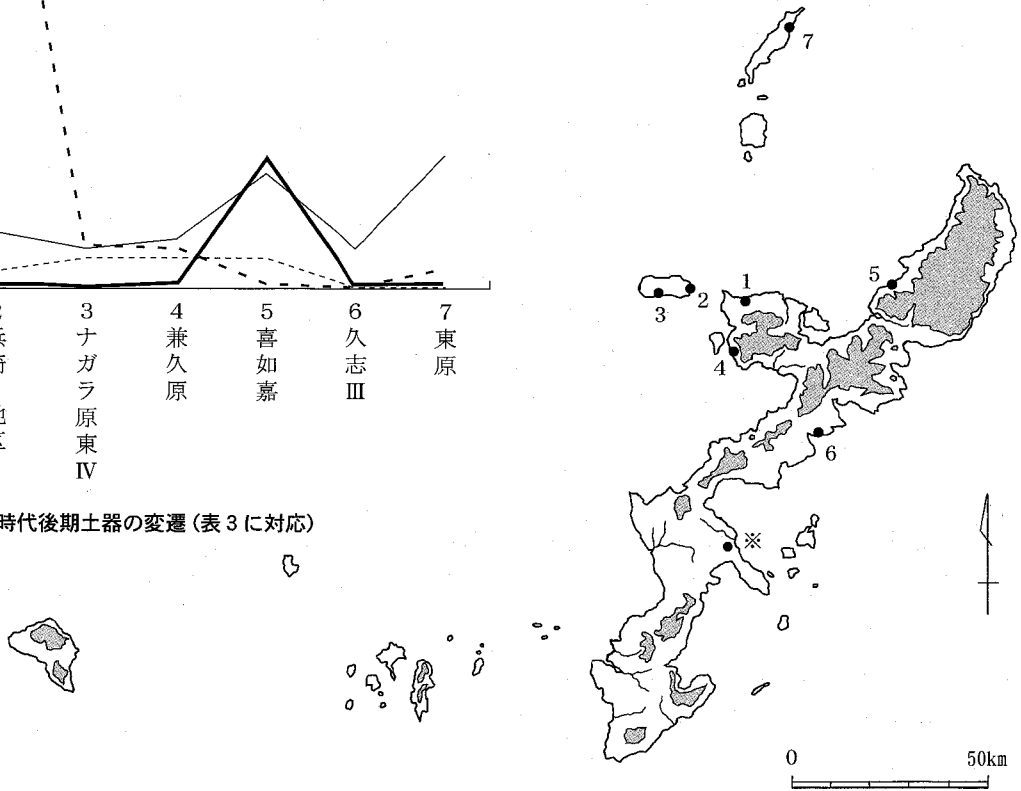


表3 沖縄貝塚時代後期土器の変遷

(樹内数字：左二つは破片数、右は割合)

遺跡名	尖底の割合 (尖底/平底)	列点文口唇部 の割合(注1)	口縁部に刻目突 帯文のある割合 (注2)	有文口縁の割合 (有文口縁/ 無文口縁)	在地土器 共伴弥生土器 共伴遺物
1.具志堅	108/30 3.6	10/419 0.02	1/49 0.01	67/352 0.19	浜屋原式、弥生中期土器
2.浜崎1地区	11/0 ∞	11/93 0.11	4/93 0.04	26/67 0.39	大当原式土器
3.ナガラ原東IV層	25/81 0.31	145/697 0.21	9/693 0.01	149/527 0.28	広田上層タイプ貝符
4.兼久原	7/25 0.28	22/100 0.22	3/100 0.03	26/74 0.35	開元通宝
5.喜如嘉	0/34 0	79/347 0.23	32/347 0.92	158/189 0.84	アカジャンガー式土器
※アカジャンガー	1/190 0.01	104/470 0.31	76/470 0.16	247/223 1.11	アカジャンガー式土器
6.久志III層	0/10 0	0/1126 0	7/1126 0.01	18/64 0.28	アカジャンガー/フェンサ下層
7.東原	2/16 0.13	0/54 0	1/54 0.02	25/27 0.93	フェンサ下層式

※ 参考資料 (文献) 1. 本部町教育委員会 1986、2. 伊江村教育委員会 1980、3. 熊本大学考古学研究室 1999、2000、2001、2002、4. 本部町教育委員会 1977、5. 大宜味村教育委員会 1979、6. 高宮広衛 1960、7. 名護市教育委員会 1980、8. 伊平屋村教育委員会 1986

(注1) A/BのAは列点文口唇部破片数、Bは口縁部破片総数。

(注2) A/BのAは刻目突帯文のある破片数、Bは口縁部破片総数。

いて数値化を試みた。これらの要素は、いずれも後期土器の特徴として抽出されてきたものである。表3はこれらを遺跡ごとに示し、従来の型式序列と先の前提に拠って、上から下に時期が新しくなるように並べた一覧である。ナガラ原東貝塚と兼久原貝塚の先後は、先述したように貝符による関係を優先させた。図5はこれに対応するグラフならびに遺跡の位置を示す地図である。

図5のグラフと表3から以下の傾向を読み取ることができる。

- ・ 尖底土器は大当原式以降急激に減少する<sup>(11)</sup>。
- ・ 口唇部の列点文は、一定の割合で存在し、フェンサ下層式以前に消える。
- ・ 刻目突帯はアカジャンガー式において急増し、その後すぐなくなる。
- ・ 有文土器の割合はアカジャンガー式で急増することを除くと、その割合に大きな変化はない。フェンサ下層式で数値が上昇しているのは、当該型式特有の貼付文様が登場することに因る。
- ・ フェンサ下層式の要素は特有の貼付文様の登場を除くと、後期土器の延長上にあるといえる。

貝塚時代後期の土器は、底部の形状変化を除くと、その主要な特徴は安定的に継続あるいはゆるやかに消滅に向っているといえる。明らかな変化は、尖底の急激な減少（図5B）と、刻目突帯と有文土器の急増（同C）である。この二つを画期とみれば、沖縄諸島北部の貝塚時代後期は、尖底土器の卓越する時期（同A）、尖底土器が少量存在する時期（同B）、尖底土器がほとんど存在せず有文土器が増加する時期（同C）、新たな文様要素の登場する時期（同D）の4期に分けることが可能である。各時期と従来の型式の関係を示すと、最初の時期は、浜屋原式と大当原式に対応し、3番目はアカジャンガー式に、4番目はフェンサ下層式に対応する。

ナガラ原東貝塚IV層は、兼久原貝塚とともにその2番目の時期に入ることになる。この時期は、尖底が急激に減少する段階として、後期土器変化の中で一定の存在意味をもつ。以上から、ナガラ原東貝塚IV層の土器を、尖底を主体とする時期と平底を主体とする時期の間に位置付け、6～7世紀に比定しておきたい<sup>(12)</sup>。

## ② 兼久式土器とアカジャンガー式土器

兼久式土器とアカジャンガー式土器の共通点については、河口貞徳が型式名こそ明示していないが早く指摘しており（河口1974、p.26）、高宮広衛も両者が並行関係にあることを述べている（高宮1978、p.18）。池田榮史は、最近両者の関係を具体的に検討し、「口唇部刻み目文あるいは刺突文、ならびに胴部刺突文を沖縄諸島の文様要素と考え、これに兼久式土器の影響が及んだことによって、文様要素の複合が起こったと考えた方が理解しやすい」ことに基づいて、「奄美諸島で兼久式土器が成立し、これが沖縄諸島の土器に影響を与えたとする仮説を提示」（池田1999、p.49）した。

両者の関係を、図5のグラフと表1をもとに検討しよう。図5グラフC点のアカジャンガー式期（喜如嘉例）では、刻目突帯と有文土器の割合が急増している。刻目突帯は兼久式土器の特徴的施文であり、文様をもつ土器が多いのもその特徴とみてよく、アカジャンガー式におけるこの変化が、兼久式土器の影響である可能性はきわめて高い。このことは、先の池田の仮説を支持している。

兼久式土器がアカジャンガー式土器に影響を与えたとすれば、それは表1のどの段階に対応するのだろう。喜如嘉貝塚の刻目突帯をもつ土器をみると、沈線や刺突、列点による施文を加えるものが多い。文様はほとんど刻目突帯より上の口縁部に施文され、また刻目突帯だけの例もある（大宜味村教育委員会1979）。この特徴を兼久式土器の分類に対応させると、高梨分類2段階の後半<sup>(14)</sup>と3段階に相当し、7世紀後半～8世紀に比定することが可能である。この想定はアカジャンガー貝塚を図5グラフと表3において兼久原貝塚（7世紀前後）の後に位置付けていることに矛盾しない。

貝塚時代後期において、互いに対照的な土器文化を展開した奄美と沖縄は、7世紀後半から8世紀の

一時期、土器型式に明瞭な共通点をもっていた。それは奄美の土器が沖縄の土器に影響を及ぼした結果であった可能性が高い。

## 2. 貝交易からみた6～7世紀の奄美と沖縄

### (1) ゴホウラ・イモガイ交易からみた6～7世紀

#### ① 6～7世紀の貝交易

琉球列島の中部圏と九州は、弥生時代以来大型巻貝を介して、需要と供給の関係にあった。弥生時代前期、北部九州弥生社会に、特別な腕輪の素材として、九州近海には生息しないゴホウラ *Tricornis latissimus* (Linnaeus) とイモガイ (アンボンクロザメ) *Lithocomus littertus* (Linnaeus) の需要が生まれ、弥生人たちは、西北九州や南九州の人々を介してこれを琉球列島に求めるようになった。ゴホウラはリーフの外の深い砂地を好んで生息している巻貝であり、イモガイ (アンボンクロザメ) はリーフ内の浅い海に生息している巻貝である。後者は比較的容易に採取できるが、前者の捕獲は困難である。弥生人は交換品を携えて南下し、島の人々にあらかじめ採取を依頼しておいたこれら貝類を入手した可能性が高い。交換品としては、すでに発見されているガラス玉や青銅製鏃、五銖銭、鉄斧など挙げられるが、きわめて少数であることから、むしろ土中に消えた布や穀物が恒常的な交換品であったと推測される (木下1989)。こうした経済行為を、貝交易とよんでいる。

弥生人との貝交易は、九州弥生人の貝殻需要が衰退したことにより、弥生時代後期半ばには一旦収束するが、弥生終末から古墳時代前期にあらたな需要が西日本で発生し、古墳時代を通じてゴホウラ、イモガイ、スイジガイ *Harpago chiragra* (Linnaeus)、サラサバテイ *Phasianella solida* (Born) 等が、大和と交易された。これらの中で多数を占めるのは依然としてゴホウラとイモガイである。ゴホウラの需要は6世紀後半、イモガイは7世紀初頭まで継続し、例外的に遺った9世紀前後の小型イモガイ腕輪1例を最後に、こうした腕輪は大和社会から完全に姿を消す (木下1996)。このようにみると、6～7世紀は、大和と琉球列島に800年継続した経済関係が終結する時期であったといえる。

一方、この時期さかんに奄美・沖縄にゴホウラ・イモガイを求めた別の集団がいた。種子島広田遺跡人たちである。6～7世紀は広田遺跡の上層期に相当する。上層人の埋葬に、多くのイモガイ製貝符とゴホウラ貝輪が伴うことから、彼らとその素材をより南のサンゴ礁地域に求めていたことが推測されるのである。こうした彼らの行動は、奄美、沖縄の6～8世紀の遺跡21箇所からみつまっている広田上層タイプの貝符と対応する。大和側の需要低下に反比例するように、種子島での需要が増大したのである。

貝交易からみる6～7世紀は、琉球列島と大和との経済関係が収束し、種子島との関係が密になる時期といえる。

#### ② 土器からみた6～7世紀の貝交易を南九州

古墳時代の貝交易を弥生時代のそれとを比べると、後者では琉球列島の遺跡にその痕跡を示す弥生土器やゴホウラ貝輪粗加工品が頻繁に出土するのに対し、前者ではこれが非常に少ない。中園聡によると、沖縄諸島にもちこまれた弥生土器のほとんどは南九州のものであり、一定量の奄美系の弥生土器と、少量の中九州、北部九州のものがこれに伴うという。また古墳時代併行期では、古手の九州系土器がみられる以外は、奄美の土器が目立つと指摘している (中園2000、pp. 123～124)。弥生時代の貝交易は南九州の関与が大きく、古墳時代ではむしろ奄美地域の関与の大きかったことが推測される。

この時期の南九州、種子島の土器についてみてみよう。中村直子、中園の研究によると、6世紀後半～末の南九州では、弥生土器の伝統をひく笹貫式土器が姿を消し、7世紀には土師器や須恵器が本



格的に使用されるという（中村1987、中園1988）。種子島でも6世紀後半には在地的土器の使用が収束し、7世紀には大和の土器に転換する（中園1988）。これについて中園は、「律令体制成立への方向性をもった畿内を中心とする体制下に組みこまれていく過程とその実態を反映している」と推測する（中園1988、p.64）。中園の一連の指摘は重要である。

ゴホウラ、イモガイ交易に直接かかわったとみられる南九州、種子島の7世紀前後は、先史時代から古代に向う時代の変換点だったといえる。

### ③ 貝交易からみた6～7世紀の動態

ゴホウラ・イモガイ交易にかかわる以上の検討から、6～7世紀を次のように捉えることが可能である。

- ・ 6～7世紀は琉球列島と大和の経済関係が収束し、種子島や奄美と沖縄との関係が密になる時期で、琉球列島における対外関係の転換期である。
- ・ 7世紀前後は、南九州と大隅諸島に律令社会の影響が及ぶ時期で、これらの地域が古代国家領域に併合される時期である。
- ・ 7世紀前後大隅諸島は、律令制の南限かつ琉球列島と経済関係をもつ北限という境界域となった。

### (2) ヤコウガイ交易からみた6～7世紀

ヤコウガイ *Turbo (Lunatica) marmorata* (Linnaeus) はサンゴ礁域に普遍的に生息する大型巻貝である。肉は美味で貝殻も利用価値の高いことから、貝塚時代の早い時期から、多用されてきた（木下1981）。大きく湾曲する貝殻は容器に適しているため、ヤコウガイ製容器は奄美・沖縄を問わず、9世紀以前の遺跡に広く普及している。

注目されるのは、7世紀前後の遺跡において、用見崎遺跡のように、ヤコウガイを目的的に採取したような現象が認められることである。同様の遺跡は、ほかに奄美大島のマツノト、泉川、長浜金久、フワガネクなどで、奄美大島に集中する傾向がある。このことに注目した高梨修は、このような遺跡をヤコウガイ大量出土遺跡とし、これが兼久式期に限定されることを明確に指摘、当該時期においてこれが交易品であった可能性を示してヤコウガイ交易を提唱した（高梨2000）。

一方木下は、6～10世紀の琉球列島で開元通宝が集中的に分布する現象に注目し、その分布性から、これが従来いわれるように遣唐使の南島路のみに原因したとは考え難いこと、7世紀前後の琉球列島全域にヤコウガイ大量出土遺跡が存在することから、開元通宝とヤコウガイに対応関係のあることを示し、琉球列島のヤコウガイが唐の螺鈿素材に使用された可能性の高いことを述べた（木下2000）。

琉球列島以外の地では、螺鈿技術があればこそ商品価値をもったヤコウガイであるが、7世紀以前でも若干の搬出例が知られる。韓半島南部、慶尚南道高靈の大加耶王族の墓（池山洞44号墳）では、5世紀末から6世紀初頭の匙状ヤコウガイ製容器が出土している（木下2001）。薩摩半島南端の松之尾遺跡では、笹貫式期（5～6世紀）のものと思われるヤコウガイの破片が1片みつまっている（枕崎市教育委員会1981）。このほか種子島広田遺跡、鳥ノ峯遺跡においてもヤコウガイ容器、ヤコウガイ製品が弥生終末～古墳時代前半の埋葬に伴っている（中種子町教育委員会ほか1996）。

以上を要するに、琉球列島のヤコウガイは、7世紀以前にわずかに大和や韓半島にもちこまれていたが、明らかに商品価値のある物産となったのは、7世紀以後である。現在のところ、7～9世紀の主要交易先は中国であったと私は考えている。

## 3. 総括

### (1) 6世紀の奄美・沖縄とナガラ原東貝塚

### ① 時代状況

6世紀は奄美・沖縄と大和との間に継続した貝交易がゆるやかに収束に向う時期であり、種子島の広田遺跡人が積極的に奄美・沖縄にゴホウラを求める時期である。広田遺跡人たちは、すでに前世紀、琉球列島に南下して貝殻の採取を始めていた。この時期大和との貝交易も、奄美人の往来によって実現していた可能性が高い。貝交易ルートに南九州人の影が薄くなったことを、土器研究成果が示している。

### ② 6世紀の奄美と沖縄

6世紀、奄美では平底の甕と壺から成る兼久式土器が成立する。沖縄北部では在来の尖底甕に平底甕が加わり、これらが壺と組み合う様式が登場する。奄美の甕は南九州土器様式の延長上で生成したものとみられ、沖縄の甕は前代からの在地様式を継承したものであった。このように、この時期両地域の土器は互いに明らかに異なる様相をみせる。それは二つの地域と南九州との距離を反映したものであった。

### ③ ナガラ原東貝塚の穀物

伊江島はゴホウラ、イモガイの多く棲息するサンゴ礁環境に恵まれているため、これらを交易対象とした往来が弥生時代中期以降6～7世紀に至るまで大和・種子島との間に連綿と継続した島である。遺跡にのこされたイモガイ集積や貝輪粗加工品、貝符、各時期の弥生土器がこのことを物語っている。貝殻の交換物と考えられるのは、出土遺物からみる限り、鉄製品、ガラス玉、弥生土器の内容物である。これらの中でもっとも普遍的なのが弥生土器であり、中期以降のそれは極端に壺に偏る（中園2000、p.123）。したがって壺に入れられて島に齎されたものが、貝殻に対する恒常的な交換物であったと推測されるのである。弥生文化の壺の機能からみて、それが穀物であった可能性は高い。そうであれば、穀物の移入は、伊江島で弥生後期（免田式）までは継続したと考えられる。この状況がその後の貝交易でも基本的に継続していれば、6世紀の伊江島に穀物の存在する可能性はある。すなわちナガラ原東貝塚のイネ、コムギを交易品とみるのが可能である。ナガラ原東貝塚における複数の分析データは、いずれも伊江島での耕作の可能性が低いことを示していて、この推定に矛盾しない。

悩ましいのはそれがどこの生産物なのか、にわかに推定し難い点である。この時期の貝交易には奄美人、種子島人、南九州人が関与しており、その先には中九州人、畿内人が連なる。交換品としての穀物はいずれかの段階で登場しているはずである。また、すでに沖縄諸島内で農耕が部分的に始まっていた可能性も否定できない。私はこの時期に、在来の尖底甕に平底甕の加わる意味を考慮すべきではないかと思う。甕が完全に平底化したフェンサ下層式期の9～10世紀、沖縄本島では確実に農耕が開始されているからである。土器の平底化と穀物食に相関関係はないだろうか。いずれにしてもこの問題は、ナガラ原東貝塚データ一つで論じられるものではない。ここでは当該遺跡出土のイネ、コムギが、貝交易の交換物として島外から齎された可能性の高いことを指摘するに止め、奄美における類例を待つことにしたい。

## (2) 7世紀の奄美・沖縄と用・見崎遺跡

### ① 時代状況

7世紀は大和と奄美・沖縄間の貝交易がほぼ終結する時期である。この時期南九州・種子島は律令国家の影響下に入り、以後古代国家の南端を形成していく。こうした北端の変動とは別に、奄美では前世紀に続いて兼久式土器の文化が展開し、沖縄でも尖底甕と平底甕の文化が継続、広田遺跡人との貝交易も続く。7世紀は、前世紀まで一連であった琉球列島と南九州との関係が政治的・経済的に断絶し、琉球列島が異郷になる時期といえる。

7世紀前半の推古・孝徳・斎明朝にはヤク（掖玖、夜勾）人、トカラ（吐火羅、靺婁、靺鞨）人の飛鳥上京が『日本書紀』に記され、後半の天武・文武朝にはタネ（多禰、多嶽）、アマミ（阿麻弥、菴美）等人の上京記事が『日本書紀』および『続日本紀』に登場する。歴史学上、これらは現在の屋久島、種子島、吐喝喇列島、奄美諸島に比定されている。上京した南島（ヤク、タネ、トカラ、アマミ）人たちは饗応、賜禄され、また都からは遣使がヤク、タネに遣わされて、7世紀末にはこれらの地域が「南嶋」として中央に認識されるようになる。こうした記録は、異域からの朝貢を喜ぶ華夷思想の表われだと解釈されている（鈴木1987、山里1999）。ただはるばる上京する南島人の立場からすれば、貝交易の終結ともなう移入物資の不足を打開しようとする、自らの事情が大きかったであろう<sup>(15)</sup>。文献による限り、同様の動きは7世紀の沖縄に認められない。

## ② 7世紀の奄美と沖縄

奄美・沖縄が大和の異郷となった7世紀、両地域の土器に前世紀からの大きな変化は認められない。ただこの世紀の後半に、奄美の兼久式土器の沖縄諸島北部への影響が強まり、後者においてアカジャンガー式を成立させた可能性が高い。7世紀後半にはアマミ人が初めて記録に登場、8世紀初頭にはタネ島が正式に律令国家の領域に編成され、8世紀前半には沖縄諸島とみられる地域名が文献に記される<sup>(16)</sup>。7世紀後半から8世紀前半にかけてのこうした北からの動きが、奄美から沖縄に伝わり、一方でアカジャンガー式を成立させた可能性を考えていいかもしれない。

また奄美では兼久式土器に伴って、韃の羽口が発見されている（マツノト遺跡、サウチ遺跡）。奄美ではこの時期に鉄器生産が始まったとみられる。沖縄で発見されているのは、現在のところ鉄製品のみである。北からの情報量の差は、奄美と沖縄の間に、明瞭に存在した。

## ③ 用見崎遺跡のヤコウガイと開元通宝

7世紀以降9世紀まで、奄美・沖縄地域のヤコウガイは、対岸中国唐朝の螺鈿工芸の貝殻素材として交易された可能性があり、交易者は東中国海を横断して琉球列島各地に至ったと考えられる。私は用・見崎遺跡をこのような交易のための遺跡の一つとみている。遺跡は岬にあってその位置はわかりやすく、砂丘をまわって海に出る水路に接した位置にあり、交易に適している。周辺海域で採取されたヤコウガイが遺跡に集められ、貝殻がまるごと交易されたと想定できる。交易の結果齎されたのが開元通宝とみられるが、遺跡の分析結果にもとづく限りここに穀物が存在した可能性は低い。

(注)

- (1)イノーとは、サンゴ礁の干瀬と海岸間にできる低潮位以下2～3m程度の浅海のこと。礁池ともいう。裾礁の発達する琉球列島特有の名称である。
- (2)第一次調査によるC砂丘の層位と、第二次調査遺構のA砂丘、B砂丘の層位は、相互に連続関係が認められないので、表記方法を独立させた。
- (3)報告書執筆段階では、この型式名を特定することができなかったが、その後の指摘によりスセン當式土器である可能性が高いことを理解した。高梨修1999p.23、新里貴之2000による。
- (4)山東省済南市の朱活氏（故人）に、実物を見ていただいた。
- (5)広田下層貝符の一部の特徴である列点文が、古墳時代前期末から中期のゴホウラ釧にも同様に認められることから、この時期を4世紀末から5世紀に比定し、これに遅れる上層貝符の時期を6世紀前後に比定したことによる（木下2000a）。
- (6)アカジャンガー式は、沖縄本島具志川市に所在するアカジャンガー貝塚出土の土器を標識として、高宮廣衛により設定された型式である。多数の甕と少数の壺とで構成される。甕は外反した平口縁をもち、頸部がしまり、

胴部のやや張る平底の形状である。壺は、小さな平口縁で頸部がしまり、胴部の張った形状である（喜如嘉貝塚例）。甕には無文のものが最も多く、口唇部に刺突文を施すものがある。文様は基本的に具志原式と同じで、甕には口縁下に曲線文を施すもの、頸部に突帯を廻らすもの等がある。南九州の成川式に並行する時期（弥生終末から古墳時代）とされる。

(7) 本測定値ではIV層とV層の数値が逆転している。試料を採取した地点のV層の直上に攪乱をうけたII層、III層が直接堆積していたことが影響したのかもしれない。V層の測定値の扱いは保留しておきたい。

(8) アオイ科の常緑小高木。熱帯・亜熱帯の海岸や河川沿いに広く生育する。ユウナとも。 *Hibiscus tiliaceus* L.

(9) 高梨1999では「刻目隆帯」という表現を使用するが、これを河口貞徳氏が兼久式土器の定義で使用した「刻目突帯」に変えている。

(10) 具志原式は、1963年に調査された伊江島具志原貝塚の4層出土土器を標識として、高宮広衛により設定された型式である。多数の甕と少数の壺とで構成される。甕は軽く外反する平口縁が多く、直立するものもある。底部には平底（くびれ平底）と尖底（砲弾状尖底、乳房状尖底）があり、外反口縁と平底、直立口縁と尖底の組み合わせる可能性が高い。壺は、小さな平口縁で、胴部の張った形状である。甕には無文のものが最も多く、口唇部に刺突文を施すものがある。口縁下に曲線文を施すもの、頸部に突帯を廻らすもの、刺突文、幾何学的沈線文を施すもの等がある。

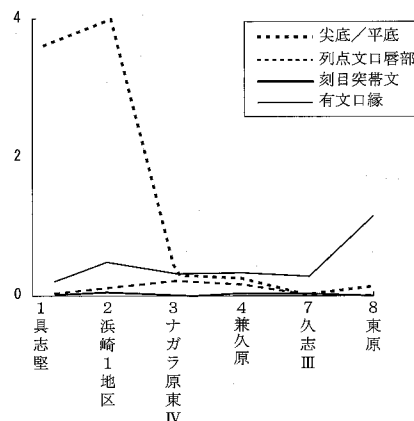
(11) 図1では濱崎1地区の底部の数値を、表現上4にしているが、表2に示したとおり、∞である。またその前に位置付けられる具志堅貝塚の当該数値がこれにくらべて著しく低いのは、多くの弥生土器平底の共伴していることが影響しているだろう。弥生土器を除外すれば、その値は濱崎1地区に近くなると予想される。

(12) ここで示したのは沖縄諸島北部の編年であり、これが沖縄諸島全域に適応されることを意味しない。同南部では、たとえば清水貝塚のように広田上層タイプ貝符にともなう時期でも、大当原式を継続し、有文・尖底化しない遺跡がある（具志川村教育委員会1989）。中部の平敷屋トウバル遺跡では開元通宝を伴う時期に至っても、大当原式が持続する。貝塚時代 後期編年では、奄美の影響の強い北部と、影響の及ぶにくい中・南部を区別する必要があるだろう。

(13) 参考までに、図5から喜如嘉例を除外したグラフを示す。貝塚時代後期の在り土器の安定した変化（底部形態を除く）がみてとれる（右図）。

(14) 高梨によれば、刻目突帯の上下に沈線が施されるものが古く、突帯の上部に限定されるものが新しいという（高梨1995、p. 7）。

(15) 山里純一は、「南島人の意識ではあくまでも交易を目的としたものであった」と指摘している（山里1999、p. 10）。



参考図 沖縄貝塚時代後期土器の変遷 (アカジャンガー式期を除く)

(16) 『続日本紀』和銅12 (714) 年に「球美」が、『唐

大和上東征伝』に「阿児奈波」が記録される（鑑真は754年入朝）。また天平7 (735) 年には役人を南島に派遣して、島ごとに立て札を建てさせ、そこに島の名、船の停泊場所、水のある所、大隅・薩摩までの道のり、遠くに見える島の名を書きつけさせた。天平勝宝6 (754) 年には、立札を修理させている。遣唐使航路の確保を目的としたこうした北からの動きが、沖縄諸島に及んでいた可能性は高い。

(参考文献)

安里進 1990 『考古学からみた琉球史 (上)』ひるぎ社

- 池田榮史 1999「沖縄貝塚時代後期土器の編年とその年代的位置付け—奄美兼久式土器との関わりをめぐる—」  
『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・  
歴史学』名瀬市教育委員会、pp. 41~58
- 藤江望編 1999「I ナガラ原東貝塚」『考古学研究室報告』第34集、熊本大学文学部考古学研究室  
具志川村教育委員会 1989『沖縄県・久米島清水貝塚』具志川村文化財調査報告書大1集  
伊江村教育委員会 1979『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘報告書』  
1980『浜崎貝塚』伊江村文化財調査報告書第9集  
1999『伊江島の遺跡 遺跡詳細分布中期報告』伊江村文化財調査報告書第13集
- 池畑耕一 1984「第3節 あやまる第2貝塚の弥生式土器・土師器の位置づけ」『あやまる第2貝塚』笠利町文化  
財報告No. 7、笠利町教育委員会、pp. 72~73
- 笠利町教育委員会 1995『用見崎遺跡』笠利町文化財報告書第20号
- 河口貞徳 1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号、鹿児島県考古学会、pp. 12~68  
河口貞徳 1996「兼久式土器」『日本土器事典』雄山閣、p. 759
- 木村龍生編 2002「I ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第37集、熊本大学文学部考古学研究室  
木下尚子 1981「貝製容器小考」『南島考古』第7号、pp. 47~60  
1987「貝符」『弥生文化の研究』第8巻、雄山閣、pp. 198~206  
1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集1、pp. 203~249  
1994「イモガイをつけた馬具」『第11回古代シンポジウム倭国の形成と東アジアの騎馬文化』資料、pp. 31~37  
1996「古墳時代南島交易考—南海産貝貝釧と貝の道を中心に—」『考古学雑誌』第81巻第1号、pp. 1~81、日  
本考古学会  
2000a「八丁鎧塚1号墳スイジガイ・ゴホウラ釧について」『長野県史跡 八丁鎧塚—史跡公園整備に先立つ  
範囲確認調査報告書—』須坂市教育委員会  
2000b「琉球列島の人びとの暮らしと倭人」『歴博フォーラム 倭人をとりまく世界』国立歴史民俗博物館編、  
山川出版社、pp. 103~127  
2001「古代朝鮮・琉球交流試論—朝鮮半島における紀元1世紀から7世紀の大型巻貝使用貝製品の考古学的検  
討」『青丘学術論集』第18集、pp. 5~53
- 岸本義彦、西銘章、宮城弘樹、安座間充 2000「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化』  
(上巻)、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp. 131~152
- 木崎甲子郎編著 1985『琉球列島の地質誌』沖縄タイムス社
- 國分直一 1966「南島の先史土器」『考古学研究』第13巻第2号、pp. 31~45
- 黒住耐二 1999「特論2. 1998年のナガラ原東貝塚調査で得られた貝類遺存体(予報)」『考古学研究室報告』第  
34集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 40~48  
黒住耐二 2000「3. 1999年度のナガラ原東貝塚調査の食用貝類遺存体(予報)」『考古学研究室報告』第35集、熊  
本大学文学部考古学研究室、pp. 45~54
- 枕崎市教育委員会 1981『松之尾遺跡』枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)  
松本幡郎 2000「伊江島の地質」『考古学研究室報告』第34集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 29~34  
弥栄久志 1985「第5章 まとめ」『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)、鹿児島県教育委員  
会、pp. 137~141
- 本部町教育委員会 1977『兼久原貝塚発掘調査報告』本部町文化財報告書第1集  
1986『具志堅貝塚』本部町文化財調査報告書第3集
- 村上浩明 1999「考察」『考古学研究室報告』第34集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 16~17  
名護市教育委員会 1980『久志貝塚緊急発掘調査概報』名護市文化財調査報告書第2集  
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号、鹿児島大学法文学部考古学研究室、pp. 57~76  
中村憲ほか 1974「分科会 土器」『第3回大学祭 資料』沖縄国際大学考古学研究会、pp. 17~21

- 中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団 1996『種子島鳥ノ峯遺跡』中種子町埋蔵文化財調査報告書(2)
- 中山清美 1983「兼久式土器〔I〕」『南島考古』No. 8、pp. 50～51
- 1984「兼久式土器〔II〕」『南島考古』No. 9、pp. 20～30
- 中園 聡 1988「土器様式の動態—古墳の南限付近を対象として—」『人類史研究』第7号、pp. 31～69
- 2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器—様式の同定と解釈—」『琉球・東アジアの人と文化』(上巻)、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp. 111～130
- 大宜味村教育委員会 1979『喜如嘉貝塚発掘調査報告書』大宜味村文化財調査報告書第1集
- 沖縄県考古学会 1978『石器時代の沖縄』新星図書
- 沖縄後期土器研究会・熊本大学考古学研究室 2001『アカジャンガー式土器の再検討—沖縄後期土器研究会・熊本大学考古学研究室ジョイント学習会資料』
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号、人類史研究会、pp. 75～106
- 2000「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』(上巻)、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp. 153～173
- 新里亮人編 2001「I ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文学部考古学研究室
- 鈴木靖民 1987「南島人の来朝をめぐる基礎的考察」『東アジアと日本 歴史編』田村圓澄先生古稀記念会編、吉川弘文館、pp. 347～398
- 高宮廣衛 1960「具志川村アカジャンガー遺跡調査概報」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
- 1978「沖縄における新石器時代の編年(試案)」『南島考古』第6号、沖縄県考古学会、pp. 11～22
- 1981「編年試案一部修正について」『南島考古』第7号、沖縄県考古学会、pp. 61～65
- 1984「暫定編年(沖縄諸島)の第三次修正」『冲国大文学部紀要社会学科編』12-1、沖縄国際大学文学部
- 1991「南島考古雑録(1)」『南島考古』第11号、pp. 21～36、南島考古学会
- 1983「編年試案第二次修正について」『冲国大文学部紀要社会学科編』11-1、沖縄国際大学文学部
- 1996「具志原式土器」『日本土器辞典』、雄山閣、p. 79
- 高宮広土 2000「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(1999年度)」『考古学研究室報告』第35集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 55～62
- 高梨 修 1995「マツノト遺跡出土の土器と編年」『シンポジウム よみがえる古代の奄美(資料)』pp. 6～8
- 1999「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク(外金久)遺跡出土土器の比較検討」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学—』名瀬市教育委員会、pp. 19～40
- 2000「ヤコウガイ交易の考古学—奈良～平安時代並行期の奄美諸島、沖縄諸島における島嶼社会—」『現代の考古学5 交流の考古学』朝倉書店、pp. 228～265
- 谷直子編 2000「I ナガラ原東貝塚2」『考古学研究室報告』第35集、熊本大学考古学研究室
- 樋泉岳二 2001「2. ナガラ原東貝塚の水洗選別試料より検出された脊椎動物遺存体(第3報)」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 40～46
- 当真嗣一・金武正紀 1986「沖縄における地域性」『岩波講座日本考古学5』岩波書店、pp. 325～364
- 当山昌直・平山廉 2001「3. ナガラ原東貝塚から出土したカメ類について」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 47～49
- 辻村美代子 1998「5. ヤコウガイ」『考古学研究室報告』第33集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 27～30
- 宇田津徹朗・藤原宏 2001「ナガラ原東貝塚の出土土器および遺跡土壌のプラントオパール分析」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文学部考古学研究室、pp. 58～66
- 若杉あずさ編 1998「I 用見崎遺跡」『考古学研究室報告』第33集、熊本大学文学部考古学研究室
- 若杉竜太・尾上博一編 1997『用見崎遺跡Ⅲ』研究室宇報告32、熊本大学文学部考古学研究室
- 山田康弘・原田範昭 1996『用見崎遺跡』研究室宇報告31、熊本大学文学部考古学研究室
- 山里純一 1999『古代日本と南島の交流』吉川弘文館